

31. 中東駐在

極東（Far East）、中東（Middle East）ヨーロッパから見た方向、距離感で地の果てといった感じです。確かに世界の中心はヨーロッパ、白人、キリスト教だと信じています。

中東ではイスラム教、イスラム教徒が世界の中心だと考えています。7世紀以降十字軍の遠征のような両者の争いは絶え間なく現在に至っても続いており、それも悪化するばかりですから宗教とは何だろうと素朴な疑問を持ってしまうます。

私達は世界史の教科としてほんの僅か十字軍の遠征を習い、遠い過去の出来事として学び年表を丸暗記してそれでお終い、その戦いが未だ続いているなど考えもいみませんでした、現地では白人の侵略、キリスト教軍の来襲と捉えていますからまさに宗教戦争、この対立の根本である宗教を理解しないと全く判らない世界です。

その様な所へキリスト教徒の白人が赴任する訳がなく、何も知らない東洋人が一人ノコノコとやって来たわけです。幸いなことには無色、無害な人間と評価され比較的簡単に迎かい入れてくれましたからひと安心でした。さらに現地語は全然理解できず、現地の食べ物もあまり受け付ない、迷える子羊に見えたのか保護の手を差し伸べてくれました。

最初のうちは現地の事務所のソファに寝て、食事は屋台で食べる日々、仕事は船の入出港の手続き、貨物の手配等これまでやってきた業務ですからそれほど戸惑うことはなく、それにベテランの現地スタッフが居りましたから何とか業務は遂行できました。

税関、港湾管理局、その他のお役所は午前9時頃一応業務開始、こちらは早朝から順番待ちで列んでいても窓口の係員はお茶やお喋りに花が咲き、ヤット順番がきて書類を提出、受付印を押して籠に入れてお終い、許可は何時出るのかは神様の思し召し、午後2時には窓口は閉ざされ、後の時間は「ラーハ」と呼ばれるゆったりとくつろぎの時間です。といって休息の時間ではなく、礼拝したり瞑想したり、家族や友人と語らいのある有意義な時間を過ごすことです。では仕事かというと生活をする上で欠かせないことであるが、それは必要悪であって、労働は神から罰として与えられたものだ、という意識が強いのです。

この労働は必要悪という価値観はユダヤ教・キリスト教にもありますが、上司であったユダヤ人の猛烈な働きには驚きでしたし、キリスト教徒の人達もよく働いておりました。ただし、それぞれの礼拝日には家族揃って正装して礼拝に出かけ、楽しい安息の日を送っているようでした。

ムスリムの人達の生活時間は「シュグル」仕事をする時間、生活上やむを得ず働かねばならないからできるだけ短くする。「ラアブ」遊びを意味しますが、我々の感覚でいう競馬・競輪とか、一寸パイとかいう遊びではありません。息抜き程度、気分転換ですが、一人であることが多いようです。「シュグル」「ラアブ」は必要悪と考えられ軽視されており、1日の中で最も重要視するのが前述した「ラーハ」の時間帯です。

我々日本人のように1日中働き続け、深夜に帰宅してフロ・ネルだけ、休日は1日中ゴロゴロ、時にはお付きのゴルフ、ムスリムの人達から見ればまさに気狂沙汰、生きている価値がないと判定するでしょう。かつて我が国の経済が上昇傾向にあった頃「エコノミックアニマル」という外来語がはやったことがあります。発信地は欧米だろうと思っておりましたが、ムスリム圏が発信源だそうです。



では娯楽はないのか？「ノミ・ウツ・カウ」は絶対的禁止、そこまで禁欲にしないと我々は考えます。ところが砂漠での生活を知らないから言えるのであって、全く何もない砂漠でこれらを許したら欲望をむき出しにした男達の争いは際限なく広がるでしょう。だから「欲望は否定しない、人間はその欲望に極めて弱い、だからあえて禁止しているのだ」女性が肌を見せないのは、男は直ぐにムラムラとなるからであって、ノミ・ウツはシャイタン（サタン）の仕業で、シャイタンはノミ・ウツを利用して神への礼拝を妨げようとしている。と教えております。日々の生活全体が敬虔な信仰に支えられていますから、単に遊び騒ぐこと忌避すべきものと考えられているようです。

女性と会話する際、言葉が良く判らないから眼や口元をみつめて何とか判ろうと必死でしたが、これが誤解のもと、あの外国人は淫らな眼で見つめていると判断されたら、さ一大変です。事務所には女性従業員がおりませんでしたから幸いでした。

一番厳しいのは性的なもので結婚以外の性的関係は絶対に認められません。もしバレたらどうなるか、結婚しなければなりません。オレには妻子があるんだといってもイスラム社会は4人まで妻帯は認められますからなんの問題もなし、さらに厳しいのは給料は正確に2等分してそれぞれに渡さなければならず、生涯面倒をみる義務が生じます。親類縁者が監視していますから誤魔化しは出来ません。最悪は相手が有夫の場合で、従業員の話では昔は公開処刑、現在でも相当厳しい刑罰があると話してニヤッとしておりました。まさに江戸時代の‘姦夫姦婦は重ねて4ッに斬れ’のようです。

次は食事について、過酷な自然環境の中で暮らす人々にとって毎日の食事は生命の維持に最も大切なことです。砂漠ですが灌漑された畑地があり結構豊富な野菜類や果物があり、スパイスも豊富です。肉類は豚肉、死肉は絶対禁止、その他の肉は「アッラーの御名においてアッラーは偉大なり」（アッラーフ アクバル）と唱えつつ、鋭利な刃物で一氣に頸動脈と喉を切開する方法での肉（ハラル）のみが食べることができます。豚肉は何故禁止なのか。コーランにそう書いてあるからなのですが、その理由は判りません。神の啓示をひたすら信

じるムスリムの人達にとって疑問を呈することは神への冒瀆です。

主食は小麦の粉を水で練って土窯で焼いたものですが、焼き芋のように道端で焼いて売っており、それに鶏の唐揚げ、野菜類を煮込み各種スパイスで味付けした料理、新鮮な果物が有りましたから、あとは自分で調達した材料での創意工夫でした。昼は外食、夜は自炊でしたが、時々家庭に招待され郷土料理を頂きました。それでも一番重宝したのがパックのカレーとカップメンでこれさえあれば世界中何処でも生活でき、日本が生んだ最高の発明品と感謝しています。

しかしこのような食生活した後、米国出張で1年半振りにロスアンジェルスのリトル東京で食べた和食の美味しかったこと身体が震え、特にみそ汁はお代りを井で願いました。この中東の地で連日夢見たのは‘みそラーメン’ですから日本人の郷愁は味噌にあるようで、幼少頃の食生活が身体に染み付いているのでしょう。

このような食生活の中、イスラム歴第9月‘ラマダーン月’断食（サウム）の30日間、日の出から日没まで一切の飲食を断ちます。異教徒である私は食べても良いのですが、同僚が断食しているので私も仲間入りし、日の出から日没まで水はおろか唾も呑み込んで駄目という厳しさです。しかし日没が過ぎると一家挙げて団欒になり、時には向こう三軒両隣、親類縁者が集まってご馳走を頂きます。私も断食したことによって仲間に入れてもらい、ラマダーンの月が無事終わった頃は体重が大分増えており、またサウムに参加したことによって信頼関係がより濃密になったことは確かです。

確かに一面は過酷な日々の連続でしたが、反面実に楽しかったのはムスリムの世界にとっぴりとつかり、彼等と共に仕事し、時には生活も共にする場合には全てが学ぶことであり、教えられることでしたから、まさに大学院並の教場と言ったところで収穫は大でした。お陰で帰国後文化人類学を講義できるようになったのはこの時得た収穫がその基です。

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の比較、その教えを見てみましょう。いずれも唯一絶



対神を信仰する一神教であり、神がこの世を創造したとする認識は同じです。そして世界は「終末→最期の審判→永遠の来世生活」へと向かっているとしています。そして三宗教ともエルサレムを聖なる都と（ただしイスラムでは至聖の聖都はメッカ）認めています。

しかし、そこにおける神と人間との関係、救済の対象と救済者などの見解は大きく食い違っています。ユダヤ教は、唯一神ヤハウェと契約を結んだのはユダヤ人だけだから救済されるのはユダヤ教徒のみと主張します。キリスト教・イスラム教では、救済は特定の民族に関わるものではなく、万人に開かれたものであるとしています。問題は救済者にあり、イスラム教は絶対神そのものが救済者です。しかしキリスト教は神と人類の間に神の子 イエスを立て「救世主」（メシア）と位置付けており、その他の被造物としての人類は全て罪人であるということになり、この部分での人間理解が根本的に異なります。

しかし難しいことは避けて通りますが、啓典三宗教は、互いに相手を否定し、排他的・独善的な姿勢は徹底しております。

実際、キリスト教徒は野蛮人に占領されている聖地を奪回するため十字軍を編成して何度も遠征をしており、これはまさに正義の為の戦いと定義されています。しかしイスラム側からすれば、キリスト教徒が徒党を組んで攻撃を仕掛け、略奪を繰り返すので、やむを得ずムハンマドの伝統にのっとり「聖戦」（ジハード）をしたのだと説明します。

アメリカがイラク侵攻の時、ブッシュ大統領が米軍は十字軍だと表現し、直ぐに取り消したことがあります。もし十字軍だと宣言したらイスラム圏はジハードを宣言したかも知れません。歴史認識の違いは難しい問題です。

ともかくキリスト教・イスラム教が互いに対立していることは事実です。我々日本人を含め非イスラム圏では、各種の情報が欧米から入ってくることが多く、そうするとキリスト教が長い歴史を通じて広めてきた歪んだイスラム観が定着してしまい、それが真実と考えてしまうのです。ですから大分誤解、曲解があり、改めてイスラムの真実を学ぶ必要があると思います。原油だけが欲しい、その他のことは興味がないのでは困ります。

トルコを始めとして中東の国々では日本に対して非常に親近感を持っています。これは直接侵略には加担したことはなく、帝政ロシアの南下政策に苦しめられていった国々では、100年も前のことですが日露戦争により助けもらったという感情が強く、さらに有色人種が白人人種に初めて勝利した快感は絶対です。ムスリムの人達の最大の楽しみは‘ラーハ’の時のお喋りで、この時仲間に入れてもらえば信頼関係成立です。その様な時古老と話していたところ日露戦争の話になり、子供の頃おじいさんから東郷元帥の話を良く聞かされたと懐かしんでおり、日本艦隊がバルチック艦隊を撃破したニュースに驚喜したそうです。それ以来呼びに来るようになりましてから仲間と認めてくれたようです。

インドではチャンドラ・ボースの消息を尋ねられたり、ドイツでは世界一の提督は山本五十六元帥だと神のように尊敬している元ナチの古老に逢ったり、アメリカでは日本軍が上陸

してくるのを心待していたと話す黒人のオヂイサンが居りました。

世界で共通の話題は歴史を題材にすることでおかげで大分話が弾みました。反対に最も嫌われるのは仕事の話しかしない人で軽蔑の対象でしかなく、また哀れな人は無宗教の人で全く信用されません。

イスラム教は宗教と言うより人生の規範‘Way of Life’です。神には服従・帰依。具体的には1日5回の礼拝。宗教上の義務は五行、シャハーダ（信仰告白）、サラート（礼拝）、サウム（断食）、ザーカト（喜捨）、ハッジ（巡礼）、これが勤行、これに加えて聖戦（ジハード）がありますが、これらは儀礼的規範（イバーダート）です。今日の法律、民法や刑法の様な実定法に相当するものは法的規範（ムアーマラート）があり、これを犯せば厳しい刑罰があり、一番厳しい刑は「背教」で死刑です。飲酒の刑は80回の苔刑、これらの法の源は神アッラーで、神の名においての断罪ですから情状酌量の余地はなく、厳しく行われます。何時の時代、どんな社会においても普遍的妥当性と実効性を持つ絶対的な規範ですから、我々の社会での法という実定法とは違い、掟として神との契約と考えます。

神の意志を忠実に守りながら生きるからこそ心安らかな日々を送ることができ、来世において永遠の楽園に入るために必要な信仰、宗教的实践ですから真剣です。この世は仮の人生、本当の人生は来世（アーヒラ）にあるのです。